

平成 22年 5月 28日現在

研究種目：若手研究 (B)  
 研究期間：2008 ～2009  
 課題番号：20720004  
 研究課題名 (和文) クワインにおける「真理と保証された信念」について—物理主義の解明に向けて  
 研究課題名 (英文) “Truth and warranted belief” in Quine ; for clarification of Physicalism  
 研究代表者  
 成瀬 尚志 (NARUSE TAKASHI)  
 神戸大学・大学院人文学研究科・特命助教  
 研究者番号：60467644

## 研究成果の概要 (和文)：

本研究により、クワインの理論内在的な真理観と理論超越的・絶対的真理観とを彼の自然主義の内部で統合的に理解することができた。ポイントとなるのは理論の内部でしか真理を判定することができないという点である。そうした真理観と対照的に、クワインが物理主義的な刺激によって「保証」について説明するのは、それがどの理論の支持者にも原理的には同じように参照可能であり、それゆえ客観的に理論について評価できるからであるということがわかった

## 研究成果の概要 (英文)：

In this research it turned out that Quine's view of immanent truth and his view of transcendent or absolute truth were consistent in his naturalism. The point is that we cannot understand truth from within a theory. In contrast, it turned out that Quine explained “warrant” in terms of physicalistic stimulus because advocates of each theory can equally referred to stimulus, therefore we could evaluate theories objectively in terms of stimulus.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：哲学・倫理学

科研費の分科・細目：西洋哲学

キーワード：クワイン、認識論、物理主義、真理、保証された信念、自然主義、デイヴィドソン、近位説

## 1. 研究開始当初の背景

クワインは1969年の論文 “Epistemology

Naturalized”の中で伝統的認識論を批判し、新たな認識論の立場として「自然化された認識論」（以下、自然主義）を提唱した。クワインの自然主義はその後、認識論の分野で大きな影響を与え、今日においても一つの大きな潮流となっている。しかし、クワインの自然主義は当初からその物理主義的な性格に批判が集中していた。その批判の代表的なものは、クワインの高弟である D. Davidson によるものであり、それゆえもっともよく取り上げられてきた批判であると言える。クワインは、物理的に記述できる刺激こそが我々の認識にとって唯一の証拠であるとしたが、Davidson は論文 “On the Very Idea of a Conceptual Scheme” (1974) で、そのように刺激に認識論的重要性を負わせることは経験主義の第三のドグマであると批判した。それに対する返答でクワインは、Davidson の批判は誤解に基づいており、その誤解の原因は「真理と保証された信念」の区別を Davidson が正確に理解していないからだと答えた。しかしその後、Davidson は論文 “Meaning, Truth, and Evidence” (1990) の中で、クワインの立場を近位説と呼び、自身の立場である遠位説と対比することでクワインの認識論を再度批判したが、その批判も本質的には先の論文でなされた批判と同様、クワインの認識論が物理主義に基づいているという点に論拠がある。

以上のような状況から、クワインの自然主義は物理主義的であるがゆえに問題があると考えられており、かつ、クワインの真理と保証された信念の区別がその問題と密接に関連しているにも関わらず十分な説明がなされていないということがわかる。このような状況には、クワイン自身にも責任がある。なぜなら、「真理と保証された信念」の区別についてクワインはほんの数カ所で簡単に

触れているだけで、積極的に論じてはいないからである。したがって、その点について主題的に扱った研究もほとんどみられない。その点を論じているものとして挙げられるのは R. Gibson の論文 “Translation, Physics and Facts of the Matter” (1986) くらいであり、私の博士論文もそこから影響を受けたものの、その問題については最後のほうで簡単に触れているだけであり、詳細な議論はなされていない。

一方、Davidson の示した枠組みである、近位説と遠位説との対比の中でクワインの認識論を解明しようという新たな動きも出てきている。F. Tersman, “Davidson and Quine’s Empiricism” (1996)、清塚邦彦氏の論文「近位説と遠位説：クワインの観察文理論に対するデイヴィッドソンの批判について」(2002)、D. Greimann, “Davidson’s Criticism of the Proximal Theory of Meaning” (2005)、などが挙げられる。そこでは一人称的視点と三人称的視点の区別や、認識論と意味論の区別を念頭に置いた多角度からの分析がなされている。このような動きは、クワインの物理主義的な認識論を理解するために、これまでなされてきたように単に伝統的認識論との対比としての自然主義としてそれを捉えるのでは不十分であると考えられるようになってきたからである。しかしそれでもなお、認識論と存在論の相互包摂や、真理と保証された信念の区別を視野に入れた研究は、私の博士論文と先に触れた Gibson の研究以外には見られない。

私はすでに博士論文の中でこうしたことを念頭に置いてクワイン認識論の解明を試みた。そこで明らかとなったのは、認識論と存在論の相互包摂という考えがクワイン哲学の根幹であり、それが伝統的認識論ともっとも異なる点であること、また、その考えに

基づいて彼の自然主義が議論の結論として導き出されていること、そして、存在論と認識論の区別がそのまま、真理と保証された信念の区別につながっているということであった。そして、その真理と保証された信念の区別を正しく理解することで初めて、彼の物理主義および認識論の意義が理解できるということを明らかにした。しかし、同時にいくつかの問題点も見つかった。そこで本計画では博士論文で浮上してきた個別の諸問題を解決することで、クワインの物理主義（および認識論）の解明という大きな課題に取り組む。

## 2. 研究の目的

本研究で私が明らかにしようとするのは、クワインが採用している物理主義という立場を、クワイン哲学全体（特に認識論と存在論）の中で位置づけ、彼の他の主張と整合的に解釈することで、その意義と射程を明らかにすることである。その成果は、クワイン哲学全体を理解することにつながるだけでなく、認識論、存在論、心の哲学などにおいて主要な立場の一つとなった物理主義がどのような立場であるのかを理解することにも貢献すると考える。この研究の遂行を通して、私の博士論文「クワインの認識論—認識論と存在論の相互包摂の解明」の中で示した、彼の「認識論と存在論の相互包摂テーゼ」に基づいたクワイン解釈の試みをさらに徹底、拡大し、これまで多くの批判にさらされてきたクワインの認識論に対して新たなクワイン像を提示したいと考える。その鍵となるのが彼の「真理と保証された信念 (warranted belief)」の解明である。

## 3. 研究の方法

研究全体を、クワインの真理観の整合的理

解、真理と対比した形での「保証された信念」の理解、クワインの物理主義の理解、の三つの部分に分けて研究を行なった。それぞれの部分が相互に関連しているのでそれぞれの部分を動じ並行的に研究することとなった。

## 4. 研究成果

クワインの真理観について問題となるのは、「理論の内部からしか真理について語るができない」という内在的な真理観と、真理に理論を超えている側面（絶対的な側面と、超越的側面）があることを認める超越的な真理観をクワインがとっている点である。前者は「真理は何らかの理論を前提にしないと理解できない」ということであり、そこから「理論が真理を決定する」ということが帰結するわけではないということがわかった。クワインはあくまで真理を決定するのは理論ではなく自然であるとする。これは一見すると理論を越えたものを認めている点で彼の自然主義と相反するよう見えるが、「真であると思っていたものが実はそうではなかった」ということは科学的探求でもよくあることであり、このような統制的理念としての真理を認めることは科学と哲学の連続性を主張した彼の自然主義とも両立することがわかった。クワインにとっては理論のレベルでしか真理を判定することができず、それとは別レベルの真理というのは認められないということを理論の決定不全性の議論から説明していることを明らかにした。それにより、理論内部で真理を判定することはある意味で絶対的であり、理論内在的な真理観が含意する相対性は見かけ上の問題に過ぎないことがわかった。

では、このような真理と対比的に語られる「保証」にとって重要である物理主義的な刺激とはどのようなものか。その点を考えるた

めに翻訳の不確定性と物理主義の関係を分析することで、クワインが翻訳と科学理論をどのように区別しているのかについて検討した。両者が証拠から仮説を立ててテストを進めるといふ共通点を持っているものの、翻訳の方は科学理論に比べて客観的証拠からの隔たりが大きいと、そこには「事の真相 (fact of matter)」といえるような明確なものがないということがわかった。またそのことから、クワインのいう物理主義というものが、存在論的前提を抜きに、証拠と理論との関係で語ることができるものであるということもわかった。このように考えると、物理主義というのは仮説のテストをする際に、客観的に観察可能な「もの」によってテストを進めていこうとする立場であり、そのテストが進み、そのテストによって理論が修正されるのであれば、そうした「もの」の存在について前提しなくても、物理主義について語るのである。また、メタレベルでいえば、そうした「仮説のテスト」によって、理論を修正していくことで物事の理解が進むという立場を自然主義ととらえることが可能だといえる。

したがって、刺激に基づいて理論あるいは信念が保証されているかどうかを考えることは、物理主義的な前提に立っているとはいえず、比較対象となっている各理論のどれかにコミットすることなく探求することが可能である。そこで探求されていることは、理論とその理論から独立の情報（刺激）との結びつきである。よって、複数の理論を一つの観点から比較するということがクワインの言う「保証」にとって重要なのであり、そのような比較を可能にしてくれる立場としてクワインは物理主義を採用しているということがわかった。物理主義的な情報は、比較検討されている複数の理論のどの支持者にも

原理的には同じく参照可能であるという意味で客観的なものである。よって刺激によって理論が正当化されるわけではないと言ったとき、デイヴィドソンのように「理論が真にならないことがある」ということを含意しているのであれば、真理と保証された信念を混同しているだけでなく、理論が真理を決定しているという前提に基づいているということがわかった。

これらの研究成果により、物理主義を存在論的観点ではない仕方で分析することが可能となり、認識論や心の哲学など幅広い分野に応用可能であると考えられる。さらに、本研究で明らかとなった真理と保証された信念の区別は、知識とは何かという認識論の根本問題を考える上でも、また、懐疑論の不自然さを考える上でも非常に重要であると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①成瀬尚志、「クワインの真理観」、『愛知』、査読有り、第21号、2009年、pp. 71-83

[学会発表] (計1件)

①成瀬尚志、「翻訳の不確定性と物理主義」日本科学哲学会第41回大会、2008年、福岡大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

成瀬 尚志 (NARUSE TAKASHI)

神戸大学・大学院人文学研究科・特命助教

研究者番号：60467644